

## 図書館における疑似科学的資料の扱いについて

### Handling of Pseudoscience Materials in Library Contexts

若 杉 亮 平\*

#### 要旨

近年、疑似科学に対する批判が緩やかに、見られるようになった。図書館は図書館の自由に関する宣言の中で、資料収集の自由をうたっている。従ってどのような資料であっても受入れるべきだという考え方がある。一方で暗黙のうちに図書館に入れるべきではないと考えられている資料もある。その一つとして疑似科学があげられる。疑似科学的な資料の北陸三県図書館における所蔵状況及び、日本十進分類法での分類を調査した。疑似科学的な資料を図書館で扱うことの困難さを調査と論考をもとに明らかにした。

キーワード：疑似科学(Pseudoscience)／選書(Selection)／図書館(Library)

#### 1. はじめに

##### 1.1 問題意識

水が言葉を理解すると言われたら、どのように受け止めるだろうか。水が言葉を理解するという主張は江本が『水からの伝言』<sup>1),2),3),4)</sup>という写真集の中で述べているものである。『水からの伝言』は一冊の本というよりも、複数の写真集からなる一連の著作と呼ぶべきものである。1999年に『水からの伝言』という本が最初に出版されており、以降は2014年現在でvol.4まで続いている。この本の核心部分は、「水は言葉を理解する。なぜなら、ありがとうという言葉を見せて水を凍らせて出来る氷の結晶は綺麗であり、ばかやろうという言葉を見せて出来る氷の結晶は汚くなるからだ」という主張である。

いわゆる疑似科学の範疇に入る主張は、昔から数多く見受けることができるだろう。普通ならば笑って済ませるところだが、これが教育の現場でも教材として使われるとなると別の問題になってくる。TOSS (Teacher's Organization of Skill Sharing) という教師の指導法を提唱する団体の教材を共有するWebサイト (TOSSラン

ド)に、『水からの伝言』を道徳の授業での活用が提案されたのだ。その中では、『水からの伝言』を例にあげて水は言葉を理解するという主張を行い、人体の七割が水からできていることを指摘し、人に対しても綺麗な言葉を使いましょう、というような道筋が描かれていた。この一連の流れについては、左巻<sup>5)</sup>によってまとめられている。他にも科学界から『水からの伝言』については、反論や反発<sup>6),7)</sup>が見られた。

確かに道徳教育として、人に対して汚い言葉を使わないようにしようという主張は恐らく正しいものである。しかし、その根拠が疑似科学であるというのは大きな問題だ。そして、道徳教育に科学的根拠をわざわざ持ち込む必要はないだろう。目的が正しいからといって、いかなる手段を用いても正当化されるという考え方は、極めて危険であると指摘できる。

このような疑似科学による問題は、大きなところではルイセンコ論争<sup>8)</sup>からテレビの健康番組に至るまで、様々な形で現れてきた。これは現代社会において「疑似科学」とでも呼ぶほかない何かしらがあつたことを示しているのではないだろうか。従って、図書館もこの“何かしら”と付き合わざるをえない状況にある。この“何かしら”のことを以降は疑似科学と呼ぶこととする。

\* WAKASUGI, Ryouhei  
北陸学院大学短期大学部 コミュニティ文化学科  
図書館概論

## 1.2 疑似科学とはなにか

疑似科学とは何か。この問題は極めて大きな問であり、問い方を変えれば科学とは何かという問にもなる。本論では、疑似科学そのものを論じることを目的とはしない。したがって、疑似科学の姿を詳細に描き出すことは求めない。しかしながら、議論を続けるためには一定の定義を行う必要性はあると考えられる。疑似科学とは「科学のよう」であり、かつ「科学ではない」という二つの条件<sup>9)</sup>を満たす必要がある。「科学ではない」だけでは、単なる非科学であり、基本的に非科学に否定的な意味合いはない。審美的、芸術的あるいは文学的といった領域などは、非科学であるがそれは当然である。ただし、非科学的という言葉となると少々状況は異なり、「科学のようなもの」に対して非科学的な要素があるという批判の意味で使われることもあり得る。

科学なのか疑似科学なのか、という問題はそれ自体が科学哲学における大きな課題である。例えば、早くに疑似科学について論じた科学哲学者としてはカール・ポパー<sup>10)</sup>があげられる。他にもトーマス・クーンのパラダイム<sup>11)</sup>などがあげられるだろう。

本稿では、主に現代の主流科学における一般的な手続きやルールを守っていないにも関わらず、自らを科学と呼称しあるいは暗黙的に科学であると示そうとしているものに対して疑似科学という呼び方を使用する。

留意すべき点として、論者によっては疑似科学という呼び方以外にニセ科学、エセ科学、似非科学、擬似科学といった呼び方がある。本論では基本的に疑似科学の名称を使用するが、書名や引用などで他の用語が使用されている場合はその用語も使用する。

## 1.3 疑似科学批判の概略

日本で「疑似科学」が認識され始めたのは、いつ頃なのだろうか。エセ科学という言い方は1977年の青山経済論集に掲載された論文に『いわゆる「科学的社会主義」の正体は何か--ほんものの科学かエセ科学か』<sup>12)</sup>という論題が見られる。しかし現在一般的に使われている意味合いとは若干違うように思われる。

続いて雑誌に掲載された記事を探すと、1991年に科学朝日が『疑似科学に迫る!』<sup>13)</sup>という特集を組んでいる。これは現在使われている意味での疑似科学に言及している特集であった。この特集では、超常現象、占星術、未確認飛行物体、心霊、永久機関などの幾つか疑似科学のトピックとともに、疑似科学の楽しみ方や論理的思考の重要性を説くなど、一方的な疑似科学排除の論調だけ、というわけではないようだ。また疑似科学以外に「辺縁科学」という名称も使用している。

科学朝日『疑似科学に迫る!』に掲載された記事は、以下の通りである。

- 過激派は「平板地球」を信じ硬派は超常現象を徹底究明--米英に見る辺縁科学の団体・雑誌(p.11-13)
- 占星術・UFO・心霊現象を標的に批判的思考を育てる--米サイコップのカーツ教授に聞く(p.13-15)
- 永久機関のむなしい夢にとりつかれる発明家たち(p.16-19)
- 新・非科学対話 健全な懐疑を抱き疑似科学を楽しむ(p.20-22)
- 論理的思考こそが科学を可能にする基盤--科学と疑似科学の論理(p.24-27)

疑似科学について言及した、早い時期のまとまった文献であれば、1980年にマーティン・ガードナーによる『奇妙な論理：だまされやすさの研究』(原書は1952年出版のIn the Name of Science)がある。ただ、1980年に出版されたものは、原書の一部を翻訳したものであり、全体が翻訳出版されたのは1989年<sup>14),15)</sup>になってからである。著者のマーティン・ガードナーは、サイエンティフィック・アメリカン誌上で数学パズルを連載していた数学者であり、アマチュアの手品師でもあった。またCSICOP (Committee for the Scientific Investigation of Claims of the Paranormal)<sup>16)</sup>という疑似科学や超常現象について批判的な立場から調査を行う団体にも所属していた。

次に、カール・セーガンにより1997年に日本で出版された『カール・セーガン科学と悪霊を語る』が続くことになる。(原書は1995年出版、原題はThe Demon-Haunted World) なお、この図

書は2000年に文庫化されるにあたって『人はなぜエセ科学に騙されるのか』<sup>17),18)</sup>というタイトル改題されている。1997年に翻訳出版された図書は、The Demon-Haunted Worldという原書タイトルを比較的そのまま翻訳している。しかし、その後「エセ科学」という単語を使ったタイトルに改題されており、わずか3年ながら時代の変遷がうかがえる。

さらに日本で1999年にマイクル・シャーマーが『なぜ人はニセ科学を信じるのか-UFO, カルト, 心霊, 超能力のウソ』<sup>19),20)</sup>（原書は1997年出版）という本を出版している。著者のマイクル・シャーマーはThe Skeptics Societyという懐疑主義者団体の創設者である。

2001年にはロバート・L・パークによる『わたしたちなぜ「科学」にだまされるのか』<sup>21)</sup>（原書は2000年出版のVoodoo Science）が出版されている。ロバート・L・パークはマーティン・ガードナーの後継者であると評されもしている人物である。

米国では1950年代よりマーティン・ガードナーの活躍に始まり、1970年代に設立された懐疑主義者団体であるCSICOPなどにより疑似科学に対する批判は、継続的に行われてきた。その批判は日本より古くから行われてきた。これに対して、日本における疑似科学に対する系統的な批判、科学の立場からの批判といったものは1990年代を通して増えていったと考えられる。

日本で疑似科学に対する系統的な批判が増えてきたとはいえ、疑似科学批判をタイトルに謳った図書はそれほど多くはない。大学図書館の総合目録であるCiNii Booksを用いて検索したところ、疑似科学、擬似科学、似非科学、エセ科学、ニセ科学、偽科学のどれかをタイトルに用いている図書は2014年9月現在で25冊程度にすぎない。もちろん、これら以外にも疑似科学を批判的に扱った図書は存在している。個別的・具体的な疑似科学の主題に対して批判を行っている図書であれば、タイトルに疑似科学と入らないことは十分に想像できる。

しかし、日本においては疑似科学に対して非常に大きな用語の揺れがあることから、うかがえるようにあまり疑似科学批判が大きな話題になるこ

とは少なかった。一般で話題になった例をあげるとすれば、1995年にと学会より出版された『トンデモ本の世界』<sup>22)</sup>は疑似科学についての興味を喚起した可能性があげられる。マーティン・ガードナーによる『奇妙な論理』は『トンデモ本の世界』が出版された後に、明らかに売上が伸びたと文庫版あとがきで述べられている。

科学哲学の世界であれば1980年台にはカール・ポパーの反証可能性(falsifiability)を中心とした議論が行われている。ポパーは反証可能性という概念を導入することにより、科学と非科学の境界設定(demarcation)の問題を論じている。ただ、科学哲学上の議論は、すぐさま世の中に役立つことを志向し、警鐘を鳴らそうとしている訳ではないことに注意すべきである。

科学哲学のような純粋学問的な議論ではなく、啓蒙的な意味合いでの疑似科学批判は主に化学や物理学の世界から行われているように見受けられる。雑誌『化学と教育』はいくつか疑似科学に関する記事を掲載しており、この領域に対する問題意識が感じられる。そもそも、化学はその出自から錬金術との関わりが強く、自ずと疑似科学に対する意識が強くなっている可能性がある。

#### 1.4 理科離れ・科学リテラシーと疑似科学

疑似科学批判に繋がる、別の文脈として情報リテラシーや科学リテラシーという言葉が考えられる。さらに情報リテラシーであればインターネットとの関係性、科学リテラシーであれば「理科離れ」といったトピックとの関係性を無視することができない。理科離れ・科学離れ（以降、理科離れに統一）が指摘されるようになって久しい。「理科離れ」というワードはそれがWikipediaに収録されるほどであり、ある程度は一般的な扱いを受けていると考えられる。理科離れが話題になりだしたのは、概ねここ30年程度とみられる。例えば、朝日新聞において最初に「理科離れ」というワードが出現するのは1989年である。その他のデータベースにおいて、理科離れというワードが出現するのは雑誌記事索引においては1994年、論文記事データベースのCiNiiでは1991年が最初となっている。とある新聞記事では、「最初は製造業離れから始まり、大学生の理系学部離れ、そし



て小中高生の理科離れへと繋がっていった」といった指摘もなされていた。

理科離れの要因は様々に指摘されている。例えば、科学が高度化することによりブラックボックスの部分が増えて興味を失うといったものや、教育における詰め込み教育あるいは反対にゆとり教育が問題であるとするものなどがある。他にも高度経済成長を経て、社会が公害など科学の負の側面を意識するようになったといった考え方もある。

どちらにせよ、理科離れは教育上あるいは社会の問題であると一般には認識されている。こういった問題の解決は、科学者や教育者に丸投げされてしまうことが多いと思われるが、しかし社会全体で問題意識を共有し、協力をする必要があるだろう。さらには、文系理系といった類型分けを超えて取り組まねばならない課題である。

当然、理科離れが起きれば主流科学についての知識が乏しくなるわけであり、その個人は科学と疑似科学の弁別が困難になる可能性がある。理科離れという言葉は一見して、子どもの問題のように思われるかも知れない。しかしながら、実際には成人についても同様に問題となってくるはずだ。

この成人の理科離れとも言えるものが科学リテラシー涵養についての課題だといえる。例えば、平成23年版の科学技術白書<sup>23)</sup>においては「科学技術リテラシー」という名称でこの問題を扱っている。その中では、成人に関する科学技術に関する認知度について日米英で比較しており、科学的な発見等に関する日本の認知度は米国及び英国よりも著しく低いという結果が示されている。これは、単に子どもの理科離れとして片付けるのではなく、「科学リテラシー」というもっと大きな問題として捉えるべきである。

科学リテラシーとは何かという問については、いくつかの考え方があるが、例えば経済協力開発機構(OECD)生徒の学習到達度調査(PISA)では、「科学的リテラシー」について次のような能力に着目している。

1. 疑問を認識し、新しい知識を獲得し、科学的な事象を説明し、科学が関連する諸問題について証拠に基づいた結論を導き出すための科学的知識とその活用

2. 科学の特徴的な諸側面を人間の知識と探求

の一形態として理解すること

3. 科学とテクノロジーが我々の物質的、知的、文化的環境をいかに形作っているかを認識すること

4. 思慮深い一市民として、科学的な考えを持ち、科学が関連する諸問題に自ら進んで関わること

このように、疑似科学の問題としては直接語られないとしても、現代の日本社会において理科離れや科学リテラシーという言葉を通じて、問題意識の共有はある程度行われていると評価できる。こういった、疑似科学・理科離れ・科学リテラシーといった問題を図書館の枠組みで考えた場合、どのような点が問題となるのだろうか。次節では疑似科学と図書館の繋がりについて選書論を通じて概観する。

#### 1.5 選書論と疑似科学

図書館の蔵書・資料を選択する行為を、包括的に蔵書構成または資料構成と呼ぶ。伝統的に蔵書選択の際には選書論として価値論と要求論という二つの論<sup>24),25)</sup>が示されることが多い。価値論は、その資料に価値があるかどうか、という教育的側面から出てきた考え方である。要求論は、市民の要求に答えることこそ図書館の使命であるという考え方によるものである。

また、大きな前提として図書館の自由に関する宣言において「図書館は資料収集の自由を有する」とされており、さらに「図書館は、国民の知る自由を保障する機関として、国民のあらゆる資料要求にこたえなければならない。」と述べられている。これに従えば、疑似科学的な資料であっても図書館から排除することはできない。ただ、ここで議論を終えてしまっただけでは意味がない。原則論としては「図書館は資料収集の自由を有する」を尊重すべきであるが、それを乗り越えて考えるべき問題もあるはずだ。

ともかく、この価値論と要求論という二元論で図書館の蔵書構成を論じると、歴史的に図書館は価値論から始まり、市民の要求を重視するようになり、そして価値論と要求論の均衡を取ることが重要であるという結論に落ち着きがちであると指摘されている<sup>26)</sup>。つまり、基本的には市民の要求

に応えつつも、常識的な判断基準により価値論を持ち込むということになる。ところが、この論理を採用すると疑似科学のような価値の辺縁部分に存在する資料については、極めて判断が曖昧になってしまう。

例えば要求論に基いて考えてみよう。全ての要求を許容するべきだという絶対的要求論に立つならば、市民からの要求があれば疑似科学的資料であろうとも収集すべきということになる。しかし、この要求論には市民の要求に応え続けられれば、自然と要求のレベルが自然と向上するという進歩主義的な考え方を前提としている。極論を言えば、錬金術の資料を要求した利用者は、その次には化学の資料を要求してくれるだろう、ということを期待していることになる。しかし、現実の公共図書館において図書館の資料構成を一切無視して、どのような要求にも応えるという立場をとっている図書館は皆無であろう。これは、現実の図書館が予算や収蔵数の制限のような枠を嵌められているためであり、この枠内を他の資料を押しつけた上に疑似科学的資料で占めさせるといふことには、当然疑問も生じるだろう。

一方、価値論に基いて考えてみると、価値尺度の問題と個々の資料の価値を判断して良いのかという問題が持ち上がる。価値尺度の問題を考えた場合、典型的な疑似科学的資料は無価値だと判断されるような尺度は、それほど非常識ではないだろう。とはいえ、価値の尺度を主流科学であるとした場合は無価値と判断されても、美術や芸術といった価値基準を使った場合は別の結果になる可能性がある。そもそも尺度とする価値基準が一般的なのかという疑問が生じる。さらに価値論においては、資料の価値判断を図書館が行うことが妥当か、あるいは可能かという問題もある。

価値論にも多大な問題があるとはいえ現実の状況を考えれば、結局は絶対的要求論が現実不可能な理想論である以上、要求論の立場を取ったとしてもどこかで資料の価値について、考えなければならぬ状況に陥るわけである。

日本における要求論は『市民の図書館』<sup>27)</sup>や前川恒雄による『われらの図書館』<sup>28)</sup>などが、一つの土台になっている。しかし、前川は『われらの図書館』の中で買いたくない本という項目に、心

霊・念写・家相・死後の世界などの本はあまり購入したくないと列挙している。そして、購入したとしても開架ではなく、書庫に収めた方が良くと述べている。そこには、たとえ要求論の立場だとしても、図書館にとって買いたくない本というものが存在していることが見えてくる。

## 2. 目的と方法

研究の最終目的として、疑似科学的資料の図書館からの排除を目的とするものではない。しかし、図書館における選書論の個別具体例として疑似科学的資料は、極めて興味深く注意すべき存在だと考えられる。

そこで本論では、図書館における疑似科学的資料の扱いを考えるための基礎的な調査を行う。まずは、公共図書館（一部大学図書館も含む）での疑似科学的資料の所蔵と分類の状況を把握する。さらに、資料の分類より図書館における疑似科学的資料の扱われ方について考察を行う。

そのために疑似科学的な資料であるとして、一種の社会問題になった『水からの伝言シリーズ』の北陸三県（石川・富山・福井）図書館での所蔵状況及び、どのような分類が付与されているのかを調査する。調査の方法は、北陸三県各県立図書館の公開する横断検索システム<sup>29)</sup>（一部、大学図書館も含む）を利用しOPACを通じて所蔵状況を把握する。

この『水からの伝言シリーズ』は単なる綺麗な写真の載っている写真集として楽しむ分には無害である。従って当然なことながら図書館などの公共の場所から排除されるべきだとは主張できない。重ねて注意が必要なのは単に疑似科学的な資料を図書館から締め出せば問題が解決すると考えるのは早計である。

『水からの伝言』は写真集としてVol. 1からVol. 4まで出版されている。それぞれに副タイトルが付与されていたりするが、基本的にはこの4巻で基本的な趣旨に相違はないため、その全てを対象とする。

## 3. 結果

### 3.1 北陸三県の公共図書館での『水からの伝言』の所蔵状況

『水からの伝言シリーズ』の所蔵状況の調査対象館は71館であり、石川県内の23の公共図書館・大学図書館、富山県内の24の公共図書館・大学図書館、福井県内の24の公共図書館・大学図書館を対象とした。調査結果は2014年9月現時点の所蔵状況である。

北陸三県の公共図書館・大学図書館で『水からの伝言シリーズ』を所蔵していた図書館の一覧を表1に示す。『水からの伝言シリーズ』の1冊目(以下、水からの伝言1のように表記)を所蔵す

る石川県内の図書館は5館、富山県では3館、福井県では6館となっていた。『水からの伝言シリーズ』を全て揃えて持っていたのは、富山県立図書館及び福井県の越前市立図書館の2館のみであった。シリーズのどれか1冊以上を所蔵していた図書館は71館中24館であった。各図書館によって、様々な事情があると思われるが途中の巻のみ持っている図書館も複数あった。シリーズであるとは言え、各巻を独立した写真集として見ることができると、この点は特に不思議ではない。

表1 北陸三県図書館 水からの伝言シリーズ所蔵状況

		水からの 伝言 1	水からの 伝言 2	水からの 伝言 3	水からの 伝言 4
石川県	石川県立図書館	○	○	○	
	金沢市図書館	○	○	○	
	七尾市立図書館	○			
	小松市立図書館			○	
	羽咋市立図書館				○
	かほく市図書館	○	○		
	能美市立図書館		○		○
	志賀町立図書館		○		
	金沢大学附属図書館	○		○	○
富山県	富山県立図書館	○	○	○	○
	富山市立図書館		○		
	入善町立図書館	○			
	魚津市立図書館		○		
	黒部市立図書館・宇奈月館	○			
福井県	福井県立図書館	○	○		
	福井市立図書館	○	○		
	敦賀市立図書館		○		
	鯖江市図書館	○			
	越前市立図書館	○	○	○	○
	坂井市立図書館			○	
	永平寺町立図書館		○		
	美浜町立図書館	○			
	福井県立大学附属図書館	○	○	○	
	仁愛女子短期大学附属図書館			○	
所蔵館合計		14 館	14 館	9 館	5 館



### 3.2 分類付与の状況

次に、どのような日本十進分類法による分類記号が『水からの伝言シリーズ』に付与されているのかを、県別に表2, 3, 4に示した。北陸三県の図書館で所蔵されている『水からの伝言シリーズ』に付与された分類記号は、「147」「435」「435.4」「435.44」の4種類であった。それぞれの分類記号の分類項目名は、147が超心理学・心霊研究、435が無機化学、435.4が無機化学—酸素族元素とその化合物、435.44が無機化学—水・重水となっている。したがって、大まかに超心理学・心霊研究として1類に分類された場合と、水に関わる無機化学として4類に分類された場合に分けることができる。シリーズあわせて最も頻出した分類記号は、435の17件である。それ以下は435.44が15件、147が9件、435.4が2件となっている。また、同じ図書館でシリーズに対して違った分類を付与しているケースは、後述するかほく市を除き基本的にはなかった。

また、大学図書館の総合目録であるCiNii Booksにおける分類は『水からの伝言シリーズ』全て「435.44」であった。同じく国立国会図書館が提供するNDL-OPACにおいては「147」が付与されていた。

この中で特徴的な分類・排架を行っていた図書館として、かほく市立図書館がある。かほく市立図書館は、『水からの伝言1』を2冊所蔵しており、それぞれ147と435の分類記号を付与している。つまり複本に対して、違う分類を行っており異なった場所に2冊が排架されていることになる。

次に、基本件名標目表に基づく件名は、どのようなものが付与されているのか調査した。シリーズを1冊以上所蔵する24館において出現した件名付与のパターンは以下の4パターンである。

1. 心霊研究, 水-写真集, 氷-写真集の3つの件名が付与されている
2. 心霊研究の件名のみ付与されている
3. 水-写真集, 氷-写真集の2つの件名が付与されている
4. 水-写真集の件名のみ付与されている

水-写真集, 氷-写真集の両方を付与する場合と水-写真集を単独で付与する場合については、

内容的な差異はさほど無いと考えられる。これを除いた上で、件名が付与される際の考え方としては、心霊研究を単独、心霊研究と水の写真集を両方、水の写真集を単独という3つの考え方があると整理できる。さらに、分類記号では435無機化学系統の記号を付与した図書館でも、件名では心霊研究を付与している場合がある。

また、大学図書館の総合目録であるCiNii Booksにおける件名は水-写真集, 氷-写真集の2つであった。なお国立国会図書館が提供するNDL-OPACにおいては、件名は付与されていない。

## 4. 考察

### 4.1 疑似科学的な資料の扱い

考察に入る前に、本論での疑似科学に対する態度について再度注意をしておく必要がある。本論では疑似科学を図書館から排除されるべきものだ、という前提には立っていない。また、積極的に疑似科学的な資料を収集すべきだとも主張しない。しかし、だからといって相対主義や極端な価値中立的立場を取ることはできない。なぜなら、「疑似科学」という用語の使用そのものが、疑似科学に対する否定的な立場の表明となっているからである。つまり、本論では疑似科学に対して積極的な肯定は出来ないものの、その図書館における取り扱いに関しては、一定の留保を残しつつ議論を進めていく。

それでは、図書館が疑似科学的な資料を扱う上で、問題となる点を整理しておく。1つ目は図書館だけに留まらない問題であるが、疑似科学をどのように評価するかという点だ。トーマス・クーンのパラダイム論を取るならば、あるパラダイム論で正しくない理論であってもパラダイムが転換するならば正しい理論になり得ると考えることができる。これは相対主義的な考え方であり、現代の科学哲学においてその影響は小さくない。この相対主義を厳格に取り入れるならば、疑似科学にも大きな価値がある可能性が秘められることになる。しかし、これだけでは現在のパラダイムに基づく他の資料を捨ててまで、疑似科学的な資料を選択する積極的な理由とはなり得ない。

結局は、図書館の問題に帰結せず社会において科学の定義をどのように受入れるかという問題に

表2 石川県内公共図書館 水からの伝言シリーズ 分類状況

	水からの 伝言 1	水からの 伝言 2	水からの 伝言 3	水からの 伝言 4
石川県立図書館	147	147	147	
金沢市図書館	435.44	435.44	435.44	
七尾市立図書館	435.44			
小松市立図書館			147	
羽咋市立図書館				147
かほく市立図書館	147/435	435		
能美市立図書館		435		147
志賀町立図書館		435.44		
金沢大学附属図書館	435.44		435.44	435.44

表3 富山県内公共図書館 水からの伝言シリーズ 分類状況

	水からの 伝言 1	水からの 伝言 2	水からの 伝言 3	水からの 伝言 4
富山県立図書館	435	435	435	435
富山市立図書館		435.44		
入善町立図書館	435.44			
魚津市立図書館		435		
黒部市立図書館・宇奈月館	435			

表4 福井県内公共図書館 水からの伝言シリーズ 分類状況

	水からの 伝言 1	水からの 伝言 2	水からの 伝言 3	水からの 伝言 4
福井県立図書館	435.4	435.4		
福井市立図書館	435	435		
敦賀市立図書館		435.44		
鯖江市図書館	435			
越前市立図書館	435	435	435	435
坂井市立図書館			147	
永平寺町立図書館		435		
美浜町立図書館	147			
福井県立大学附属図書館	435.44	435.44	435.44	
仁愛女子短期大学附属図書館			435.44	



なるだろう。だとすれば、議論のための材料を揃えておくのが図書館の使命であるとも考えることができる。ある程度の積極性を持って、疑似科学的な資料を選択する意義はこの辺りに見いだせるかもしれない。

2つ目の問題は、図書館が資料の価値を判断してよいのかという点である。これについては、すでに1章5節で選書論の中の価値論に関わる議論として整理した。絶対的な要求論、つまり利用者から要求があった資料は、予算や収蔵能力を無視して全て揃えることが可能である、という状況が現実的ではない以上、図書館は資料の価値判断をせざるを得ないのが現実である。

すでに1章5節でも指摘したが、要求論の理論的源泉である前川であっても買いたくない本として、心霊・念写・家相・死後の世界などの本をあげている。これは価値判断に他ならず、そこにはまさに疑似科学的な資料が含まれている。

しかし、注意すべき点として要求論の立場に立つ場合、資料収集の面において疑似科学的な資料を避けるとしても、資料提供の面においては基本的には絶対的要求論が貫かれている点である。つまり資料複写、相互貸借といった方法であれば疑似科学的な資料でも提供するという態度がとられている。実際に岡部ら<sup>30)</sup>の調査において、図書館員が「買いたくはないので他の図書館が持っていれば、それを借りる」という趣旨の発言をしている。資料提供という面のみで見れば隠される価値判断の実態が、資料収集の面においては現れてく

ると指摘できるだろう。

#### 4.2 資料収集における図書館の態度

本論では疑似科学的な資料を選書論の観点から論じているため、特に資料収集という自館が疑似科学的な資料を収集する場合の扱いを考えていく。表5において図書館における疑似科学的な資料の収集について、図書館が取りうる4つの態度を示した。

ここでは、順に4つの態度について説明していく。1つ目の「価値論による疑似科学排除」は価値論を是認した上で、疑似科学的な資料は図書館資料としての価値がないという判断をした場合である。しかしこの態度を取ると、『水からの伝言』のようにその理論は疑似科学であるものの、写真集として楽しむ分には問題がないというようなケースにおいても、収集を拒むのは問題があると思われる。2つ目は「価値論による疑似科学受容」である。ここでは受容という言葉を使ったが、全てを受入れるという意味ではなく受け入れを拒否しないという程度の意味である。価値論は採用するものの、価値尺度の方に多様性や柔軟性をもたせ、疑似科学的な資料だからという一律の理由のみで拒否をしないという態度である。3つ目は「制限的要求論による疑似科学排除」である。要求論を重視するものの、利用者の要求を絶対とせず「常識的な」判断を図書館が行い疑似科学的な資料を拒む場合である。これは前川などの立場に近い態度だといえる。4つ目は「絶対的要求論による疑

表5 図書館における疑似科学的な資料の収集における扱い方

	疑似科学を受入れない	疑似科学を受入れる
図書館が 価値判断を行う (価値論)	1. 図書館が価値判断を行うのは構わないし、疑似科学は排除すべき(価値論による疑似科学排除)	2. 図書館が価値判断を行うのは構わないが、疑似科学的資料も受入れる(価値論による疑似科学受容)
図書館は 価値判断を行わない (要求論)	3. 図書館が価値判断を行うべきではないが、疑似科学は常識的には好ましくない(制限的要求論による疑似科学排除)	4. 図書館が価値判断を行うべきではないし、疑似科学的資料も受入れる(絶対的要求論による疑似科学受容)

似科学受容」である。どのような資料であっても利用者の要求があれば収集するという立場であり、資料の価値に関わらず断る可能性は全くないという態度である。そもそも、この立場を取る場合は資料の価値について触れる必要は全くない。しかし現実には場所や予算の制約などがあり、不可能な態度でもある。

#### 4.3 分類記号による価値判断

次に現実の図書館に収蔵されている、疑似科学的な資料の扱いについて考察を進めていく。『水からの伝言』の分類状況の調査結果においても述べたように、超心理学・心霊研究として1類に分類された場合と、水に関わる無機化学として4類に分類された場合に分けることができる。件名付与については3つのパターンがあり、心霊研究を単独、心霊研究と水の写真集を両方、水の写真集を単独があった。

この分類記号や件名の付与というのは、一般的には資料の価値を判断しているとは見なされないだろう。しかし、超心理学・心霊研究のような分類の場合であっても価値判断ではないと言えるのだろうか。まず、前提として超心理学とはれっきとした学術領域の一つである。ただし、これまでのところ現在の主流科学の手法に基づく研究としては、目立った成果をあげられていない、というだけである。したがって超心理学という分類自体には特に疑似科学であるという意味は含まれていない。

しかしながら、その資料自身は超心理学・心霊研究であるという認識がないにも関わらず超心理学・心霊研究に分類された場合はどうなるであろう。『水からの伝言』の場合は、おそらくこのケースに当てはまると考えられる。このようなケースにおいて、図書館が超心理学・心霊研究という分類を付与する行為は一種の価値判断になるだろう。

一方で、疑似科学的な資料を片端から超心理学・心霊研究という分類に押し込めることにも問題がある。本来、超心理学・心霊研究や真当な学術領域として成立することを目指して研究が行われているのであり、その領域に疑似科学的な資料を分類することは学術研究を蔑ろにする行為ともとれるからである。

#### 5. 今後の課題とまとめ

図書館で疑似科学的な資料を扱うことを考える際には、疑似科学批判や論からのアプローチと、図書館の選書論からのアプローチが考えられる。本稿では日本における疑似科学批判を概観しつつ、図書館の選書論にも触れた上で調査を行った。

図書館が絶対的要求論に基づき、疑似科学的な資料を全て受入れるという態度は現実的ではない。そのため、程度の差こそあれ疑似科学的な資料について何らかの価値判断を行っている様子を指摘した。その一つとして資料を分類する際の問題点を指摘した。

調査は『水からの伝言シリーズ』のみを対象とし、地域も北陸地方に限られたものであった。そのため、今後は調査対象や範囲の拡大とともに、科学哲学分野からの疑似科学論の精緻化と選書論についての更なる整理が課題となっている。疑似科学的な資料がなくなることは考え難く、今後も図書館においてもこのような種類の資料を付き合い合っていく必要があるだろう。

#### <注・参考文献>

- 1) 江本勝. 水からの伝言：世界初!!水の氷結結晶写真集. 波動教育社, 1999, 145p.
- 2) 江本勝. 水からの伝言：世界初!!水の氷結結晶写真集 vol.2. 波動教育社, 2001, 145p.
- 3) 江本勝. 水からの伝言：自分を愛するということ vol.3. 波動教育社, 2004, 177p.
- 4) 江本勝. 水からの伝言 vol.4. OFFICE MASARU EMO-TO, 2008, 216p.
- 5) 左巻健男. 水はなんにも知らないよ. ディスカヴァー・トゥエンティワン, 2007, 182p.
- 6) 菊地誠. "「水からの伝言」を教育現場に持ち込んではいならないと考えるわけ" 菊池誠の物理ページ. 2005-11-28, [http://www.cp.cmc.osaka-u.ac.jp/~kikuchi/nisekagaku/mizuden\\_doutoku2.html](http://www.cp.cmc.osaka-u.ac.jp/~kikuchi/nisekagaku/mizuden_doutoku2.html), (参照 2014-09-26).
- 7) 安井至. 「水からの伝言」と科学立国. 化学と工業. 2006, vol 59, no.9, p.953-954.
- 8) ルイセンコ論争とは旧ソビエト連邦で環境状況により遺伝的性質を変化させることができるという説が、トロフィム・ルイセンコの政治力による強化されてしまったケース。一時期ソ連ではメンデル遺伝学者が学界から追放された。現在ではこのルイセンコ説は認められていない。

- 9) 伊勢田哲治. 疑似科学と科学の哲学. 名古屋大学出版会, 2003, 282p.
- 10) ウィル・バッキンガムほか著, 小須田健訳. 哲学大図鑑. 三省堂, 2012, 352p.
- 11) トーマス・クーン著, 中山茂訳. 科学革命の構造. みすず書房, 1971, 293p.
- 12) 日下藤吾. いわゆる『科学的社会主義』の正体は何か : ほんものの科学かエセ科学か. 青山経済論集. 1977, vol 28, no.4, p.1-61.
- 13) 疑似科学に迫る!. 科学朝日. 1991, vol.51. no.5. p10-27.
- 14) マーティン・ガードナー著, 市場康夫訳. 奇妙な論理I : だまされやすさの研究. 早川書房, 2003, 318p.
- 15) マーティン・ガードナー著, 市場康夫訳. 奇妙な論理II : なぜニセ科学に惹かれるのか. 早川書房, 2003, 319p.
- 16) 2014年現在, CSICOPはCSI: Committee for Skeptical Inquiryに改称されている。
- 17) カール・セーガン著, 青木薫訳. 人はなぜエセ科学に騙されるのか上. 新潮社, 2000, 406p.
- 18) カール・セーガン著, 青木薫訳. 人はなぜエセ科学に騙されるのか下. 新潮社, 2000, 406p.
- 19) マイケル・シャーマー著, 岡田靖史訳. なぜ人はニセ科学を信じるのかI : 奇妙な論理が蔓延するとき. 早川書房, 2003, 266p.
- 20) マイケル・シャーマー著, 岡田靖史訳. なぜ人はニセ科学を信じるのかII : 歪曲をたくらむ人々. 早川書房, 2003, 334p.
- 21) ロバート・L・パーク著, 栗木さつき訳. わたしたちはなぜ「科学」にだまされるのか : ニセ科学の本性を暴く. 主婦の友社, 2007, 458p.
- 22) と学会編. トンデモ本の世界 : MONDO TONDEMO. 洋泉社, 1995, 334p.
- 23) 文部科学省. 科学技術白書. 平成23年版. 文部科学省, 2011, 287p.
- 24) 河井弘志. 図書選択論の視点. 日本図書館協会, 2009, 371p.
- 25) 山本昭和. “選書論”. 図書館情報資源概論. 馬場俊明編. 日本図書館協会, 2012, p.189-194. (JLA 図書館情報学テキストシリーズ3, 8)
- 26) 安井一徳. 図書館は本をどう選ぶか. 勁草書房, 2006, 164p. (図書館の現場, 5).
- 27) 日本図書館協会. 市民の図書館. 増補版, 日本図書館協会, 1976, 168p.
- 28) 前川恒雄. われらの図書館. 筑摩書房, 1987, 246p.
- 29) 使用した横断検索システムは以下のシステムである。石川県内図書館横断検索 (<http://www.gakushuin.ac.jp/~881791/fs/>), 富山県内図書館OPAC横断検索ネットワークシステム (<http://lib2.lib.pref.toyama.jp/CrossLibrary/>), 福井県内図書館等横断検索 (<http://www.library-archives.pref.fukui.jp/>)
- 30) 岡部晋典, 中林幸子. 科学的合理性に著しく反する図書を図書館はどう取り扱っているのか : 聞き取り調査を手がかりに. Library and information science. 2012, no.68, p.85-116.

